

風戦そよぐ

遥 弥生

かすかなプロパンガスの臭いが鼻を突く。

「東峰大学正門まで、お願いします」

行き先を告げると、タクシーは静かに走り出した。

窓硝子越しに通り過ぎてゆく眩しい緑や、後部座席にまで吹き付けてくる冷たい空調の風が季節を物語っている。腕時計の短針は9を少し過ぎたぐらいだったが、屋外はすでに灼熱地獄であった。杖がなければ行き倒れている。

室内外の寒暖差がこたえるようになったのは、近年問題となっている地球温暖化現象のせいなのか、それともわたしの年齢のせいか。夏、冬、あと幾度乗り越えられるだろう。

「大学の先生？」

ミラー越しに運転手が尋ねてきた。精悍だが、年相応の皺が刻まれた顔立ち。近頃は気軽に話しかけてくるタクシードライバーもめっきり減ってしまったとの印象を持つていたが、いやはや、古い人間というのはどこにもいるものだ。

相手が距離を話めたら、こちらも兜を脱いで相対するというのが年寄りの智慧、

「そんな大層なものじゃないですよ、中学生の孫がいるんですが、その部活の試合を見に」

と笑って返す。

「中学生が、大学で試合ねえ。よっぽど大きな大会か何かですか？」

「まあ、大きいことは確かなんですが、サッカーとかそういう類のものではなくてね」

前置いて一呼吸する。説明するのが少々厄介なところだ。当人の智司さとしはしよつちゆうこの手のやり取りに苦労していることだろう。

「ダイベート、って。わかりますか」

なんでも題材を決めて、それについて討論をするとかで。しどころどころに孫から聞きかじった説明を披露する。

「へえ……」

しばしの沈黙。わたしも数週間前に智司から説明を受けたときには、似たような反応をしたものだ。

「なんかあれだ、演説大会みたいなの」

「……まあ、そんなようなものでしょう。わたしも詳しくは」

ほとんど同じ質問をして、智司に叱られたことは秘密にしておくことにした。わたしの生半可な知識では巧く説明しきれないのが目に見えている。ごめんよ、しかし名前だけでも広めておいたジジイを赦しておくれ。

「そんなものに出られるとは随分賢いんですね、お孫さん。お爺さんの教育の賜物だね」

「そんなものではないですよ。わたしも昔はよく勉強したものが、最近は何もつきり……」

「わかりますよ！ 俺なんか難しい本は昔から読まないけど、最近は漫画ですら駄目だね。目が疲れる」

食べ物とかの注意書きなんかさっぱりわかりませんわ、

息子にもそれでよく叱られる、と、運転手の関心が智司の部活のことから老化の苦勞へと移ったところで、

「おっと、東峰大学」

ハンドルを切って手際よく車体を路肩に寄せる。さすがはプロ、といったところか。

「一千と、六百、四十円になります」

差し出されたトレイに千円札を二枚乗せる。お釣りは結構です、楽しい時間をどうも、と告げて車を降りた。

——孫自慢の機会をありがとう、という気持ちも込めて。

*

父母が仕事で忙しかったこともあり、智司が幼いころから、幼稚園の運動会、バスケットボールのクラブチーム、ピアノの発表会といろいろ見て回ったが、なるほど会場が大学というのは初めてだ。人波に大学で青春を、いやそれ以上の長い時間を過ごしたが、それも若かりし頃のこと。久々に足を踏み入れる施設にどんな心境で臨めばよいのか、悩ましい。いや、そもそも入り浸っていたのは、講義室ではなく実験室だった。

下車すると、再びジワリと熱い空気が全身にまとわりついた。蟬の鳴声が飽和するコンクリートの森の中を、あらかじめ教えられていた建屋に向かって歩く。自分が大学生であったころにはさほど意識しなかった、正門か

ら目当ての校舎までの距離。今は甚だしく感じられる。

今日の日付もあって、ふと大昔のことを思い返してみる。屋外のラジオを前に膝をついていたあの日は、今日ほど暑かったろうか。虫の音は今日ほどうるさかったろうか。すでにセピア色の写真の中にしかない記憶を手練り寄せてはみるが、はつきりと再現することはなかなかできなかった。

会場の校舎は現代的なこざつぱりとした面持ちをしていた。最近建て増しされたものであろうか。同じ年頃の老人が見たらマンシヨンなんぞと勘違いしそうだ。

まだまだ無名の競技だと聞いていたが、辿り着いた校舎の前には立派な看板が目印として立てられていた。「第○回 全国中学校高校生ディベート選手権」との記述から、

智司の言っていた「ディベート甲子園」というのはおそらく、この討論会の競技的な性質を表す通称なのだろう。そんなことを考えながら入構する。

関係者でもない杖突の老人がやってくるのはさすがに珍しいようで、受付にいたお若いスタッフの女性は少々驚いていたが、時間をかけて丁寧に施設やスケジュールの説明してくれた。

「孫が準決勝戦に出るといいますよ」

わたしが話すと、その方は

「どちらの学校ですか？」

とわざわざ確認したうえで、控室の場所まで教えてくれる。

「試合前にお会いになりますか？」

しばし考える。智司ももう中学生だ。この頃は随分不愛想になって、父母にも一人前に反発するようになっていると聞く。

「……いやあ、気が散るでしょうから。今日は見守りに徹するつもりでいますよ」

「そうですか？ 私が見守るの頃だったら、おじいちゃんに会いたいけどなあ」

すると彼女も元々は大会参加者だったのか。どのぐらいついていてはいる大会なのかはわからないが、かつての競技の担い手が後輩たちにより環境を残そうとしている姿には頭が下がる。

自分が彼らぐらいついとき、同じことが出来ていただろうか、という思いが胸をかすめる。

「ご丁寧ありがとうございます」と女性に会釈して、試合会場になっているという二階に向かった。階段を使うのは健康維持のため——あるいは意地と書くのかもしれないが。

渡されたパンフレットについていた地図に従って角を二つほど曲がると、ひととき出入りの激しい教室があった。もう一方の準決勝戦は三階で開催されているとあるから、ここが智司たちの会場で間違いないだろう。目立たないように後ろの扉から中に入る。

講義室のなかでは大きい部類に入るだろうか。観客もさることながら、立派な脚付きのカメラなんでもずらり

と並んでおり壯観だ。

初めは後ろの方にこそりと座ったが、選手たちは前方に集まって討論するらしいということがわかり、あまりに遠いので中ほどのところ——ただし、真ん中に座るのはなんだか気が引けたので左端——に移動した。

目を凝らすと、前方の黒板の両端には「肯定」「否定」とそれぞれ書かれており、どうやらそれが討論でのスタンスを表しているようだ。

やがて、教室の前の扉から、学ランの少年たちがわらわらと入ってきた。見覚えのある学生服だぞと思っていると、やはり、最後尾に続いたのは智司だった。

首を曲げて、何やら手元の紙を熱心にめくりながら歩いている。真剣な様子を嬉しく思いつつも、視界が塞がると危ないなどと考えてしまうのは肉親の性か。あれこれと思いめぐらしているうちに、智司たちは右側の、「否定側」の貼り紙のところにならんだ机に落ち着いた。

相変わらず眉間にしわを寄せて手元の紙に目を落とす智司を見ながら、心なしか顔つきが精悍になったかな、と思うが、しかしそれもつかの間、周りの学友たちと比べると頭一つ分ほど背の低いことに気づいた。あれの母親も幼いころから病気がちで、しょっちゅう大熱を出しては大層気を揉ませられたものだったが、智司も身体は強い方ではなく、小学校のころなどは帰宅できない両親に代わって迎えになど行かされたものだった。中学に入

ってからはそんなこともなくなったが、ああしてみると

やはり同年代の中では小柄なほうなのだ。飽食の時代といわれて久しい現代に、あのような身体の児童たちが死んでいった頃と同じ心配をするのは、或いは杞憂にすぎぬのかもしれないが。

おっと、孫の活躍をぼうつと眺めているだけのジジイではあとで智司に叱られるかもしれない。そう思って、せめて対戦相手と議論のテーマ——「論題」というらしい——を確認せねばと、一度ひっこめたパンフレットを再び引つ張り出そうと鞆をまさぐっていると、前のほうで選手たちと書類を手交していたスタッフの一名がよく通る声で話し出した。

「五分前になりました。選手の皆さん、観客の皆さんはご着席ください」

これを合図に、それまであちこちから話し声のしていた会場が水を打ったように静かになる。さすがこういう競技にかかわるだけあって、観客たちも行儀の良い。それに、おそらく緒戦で敗れてしまった選手たちなのであろう、学生服の姿も散見される。こういう競技には育ちのいい子たちも多いであろうとはいえ、中高生ながら感心なものだ——最も、大嫌いな学校の授業ではこうもいかないのだろうか。

「観客の皆さん、本部で認められたものを除き、録音・録画はご遠慮ください。また、試合中、携帯電話は電源を切るか、マナーモードに設定してください」

おっと、学生たちの高潔さに感心している場合ではな

い。スピーチの邪魔にならないよう、観客にも注意がなされる。幸いにして携帯電話もビデオカメラも持っていないから、何も心配することはなかったが、せめて試合中に、咽たり咳き込んだりしないように気をつけねば。

そうこうしているうちに、スタッフによる一通りの注意事項説明が終わり、

「肯定側。立論、藤井谷聡介さん。質疑、糸山九朗さん。

第一反駁……」

と、選手とその担当する役割の紹介に移る。名前を呼ばれた選手がひとりずつ起立、「はい。よろしくお願ひします」と返事、着席。これを四度繰り返したあとで、こんどは「否定側」の紹介が始まった。

「……第一反駁、谷村修さん。第二反駁、鹿ヶ谷智司さん」

「谷村」と呼ばれたチームメイト——おや、中学生らしからぬ美丈夫だ。あれとの体格差を云々するのは少々不公平かもしれない——が挨拶をしたあとで、名前を呼ばれた智司がすくりと立ち上がった。

はい、と返事をしてから、わずかに姿勢を正すぶんの空白があつて、宜しくお願ひします、と挨拶する。

ちやうど今座っているこの場所と反対側の端で、へこりと頭を下げたわたしの孫の声は、人より少しだけ大きなものになろうと頑張っているながら、僅かに震えているようにも思えた。——いや、考えすぎか？

智司の着席を合図に、一瞬停まった時間が再び動き出

す。「この試合の審判の方に、「挨拶を頂きます」とスタッフが話し出し、今度はそのスタッフの後方に座っていた審判団が順に挨拶を始めた。会場も最初のころの魔法にかけられたような沈黙は徐々にほつれ始め、多少の物音が混じるようになってきた。

わたしも思わず止めてしまった息をこそりと吐き出した。背中がわずかに汗ばむのを感じる。冷房のよく効いた建物に入って以来忘れていた、夏の暑さの存在を確かに再認識した。

パンフレットをうちわ代わりに。パタパタとやりだしたところで、

「それではこれより、第〇回中学高校生ディベート選手権 中学生の部 準決勝第一試合を開始いたします。論題は……」

論題と学校名の読み上げがあり、
「肯定側立論、時間は四分間です。始めてください」
タイマーの押される音と共に、演台に上がった選手が手元の原稿を音読しだす。

試合が始まった。

*

結論からいうと、試合の中身は半分を理解できたかどうかというところだった。内容が難解というより、スピーチの速度がすさまじい。審判たちはこのスピーチをす

べて聞き取れているのだろうかと不安になる。ただし、競技のつくり自体はとても興味深いものであった。

まず最初の「立論」だ。「肯定側」は論題に沿った自分たちのプランが解決する問題について主張し、つづく「否定側」はそのプランを採択するどのような問題が発生するかを説明する。論題は国会の意思決定に関するもので、その問題解決／発生過程に関する説明そのものは複雑なものだ。しかし、「立論」の最後では両陣営とも、その問題がいかに排除すべき、深刻な問題なのかということ自体に言及していたのが印象的だった。

なるほど、如何にプランの影響力が確実であっても、それが解決する、あるいは引き起こす問題それ自体がつまらないものであつては仕方がないということなのか。中学生一人で四分にわたる原稿を滔々と読み上げていること自体称賛に値することだが、この部分の議論には双方の主張について思わず頷かされてしまう。

己の論理についての自信——と、おそらく、ここまできちんと準備してきたことについての、若者らしい誇り——に満ち、聞いた直後は素人のわたしには完璧だと感じられた「立論」だが、しかし、ここに直後の「質疑」担当者が嘔みつく。いや、忍び寄るといった方が適切かもしれない。焦りを見せた方が負けだという緊張からくる自制か、やり取りそのものは極めて静かだ。が、同時にその水面下で鋭い攻撃がなされていることが伝わって

くる対話でもある。はじめは本当にゆっくりと、だが次第にはつきりと「立論」の弱点が浮かび上がってゆく。

十代の子供たちが、スポーツとしてとはいえず、国会の問題点を鋭く指摘し、真剣に議論を戦わせている。その姿を見つめるわたしの心にふと影が差す。

——わたしはあの子らと同じか、やもすると少々年長ですらあつた頃に、同じような熱心さを以て天下国家を論じたことがあつたらうか。

わたしも大学生のころは、同じ工学部が一番無関心な連中と比べれば、はるかに真剣に、政治や経済についての議論をしたものだ。それを簡単に否定するほど、自分の人生を卑下しているつもりはなかった。しかし本当に彼らと同等であつたならば、思い出すのも忌々しい、あの過ちに加担するようなことはあつたらうか。

大仰に賛同したわけではない。だが、堂々反対することもしなかつた。論敵の弱点をなら戦略的に分析することなく、社会的な圧力に屈服していった。心に理想の自由民主主義を思い描きながら、しかしそれを口にすることなく体制に抑賛よくさへんしたのだ——面白くもない冗談だ。

ピピピピピピ、ともう聞きなれたタイマーの音とともに、スピーチごとの準備時間が幾度目の終わりを迎えた。「否定側第一反駁の方、準備はよろしいですか」という声とともに、例の美丈夫の谷村君が演台に上がる。「はい」「時間は三分間です。始めてください」との合図とともに試合が再開される。

『プランの『解決性』について二点反駁してゆきます。一点目として、国民が国政を監視できるようにすることは、直接国政の改善につながるわけではありません』

彼の言うとおりだ、と思う。わたしらのひと世代前の父兄たちが熱狂したデモクラシーは、結局社会を変えることはなかった。「地獄への道は、善意で舗装されている」とはだれの言葉だったかな。国家改造という真夏の夜の夢に浮かされて、我々は、

「短絡的な政策に飛びつきます」
なぜなら、

「専門家でなく、当事者意識も薄い一般国民は、長期的な視点で判断を下すことが難しいからです。明治大学吉原 1990年より引用開始『……』」

悔しいが、わたしらはそうだった。あの頃、老いた元老重臣連などより、我々青年のほうが賢明な判断ができるはずだと叫んでつかみ取った権能で、できたことは結局、黙っていることだけだった。何かが間違っていると思いつつ声を上げなかったのは、結局のところ、「……ツケを払うのは自分ではない、という漠然とした楽観が根底にある』引用終了」

谷村君は続けて、ナチスドイツに関する資料を読み上げた。国民の熱狂的な支持を背景に、国民の権利が失われてしまったという趣旨のようだ。わたしは演台から目を逸らし、その右に控えている智司の姿をさぐった。存分に計画された反論なのだろう、メモを取る素振りもな

く、智司の瞳はひたすら審判の反応を窺っていた。わたしのほうに気づく様子は無かった。

*

「第一反駁」というポジションは短い、実に激しかった。まず否定側の「第一反駁」があり——今度は否定側が先攻だ——次いで肯定側にも同じ機会が用意される。それぞれたった三分間の中で、相手の立論への反対意見と、自説についての補足説明がとてつもない速度で繰り出されていた。まるで格闘技での激しい応酬を見ているかのようだ。

そして今、私たちは皆、息を吞んで演台のほうを見守っていた。会場は、否定側の「第二反駁」前の準備時間を迎え、重々しい沈黙に包まれている。議論の深化に対応するためか、肯定側の「第一反駁」の前から、それまで一分間ずつ設定されていた準備時間が二分になった。ゆえに一層、この時間が長いもの感じられる。そしておそらく、そのことを強く感じているのは観客だけではない。

誰よりも、今、次のスピーチに備えて演台に立っている智司だ。

「第二反駁」もまた、否定側から行われ、それから「肯定側」に手番が渡されるようである。試合最後のスピーチは肯定側の「第二反駁」。智司のスピーチが終われば、否

定側の面々は座して天命を待つことしかできない。

わたしは、まっすぐと、どこか遠くに目を向けながら、きつと唇を固く結んだ孫の顔を見つめた。自分が最後の一線を守り抜くのだと固く決意した少年の面持ち。

わたしは、智司がこれから話すことについて、恐れを抱き始めていた。これまで智司のチームメイトたちのスピーチは、素人のわたしには完璧なものに思えた。もし智司が、何か致命的な失敗をしたら——。幼稚園の運動会するとき、わたしは徒競走で転んでむせび泣いた智司に手を差し伸べて、いっしょにゴールまで走ってやれた。だが今は、中学生になった智司に、老いぼれがしてやれることは何もない。

いや、それだけなら、まだいい。
わたしは「第一反駁」の谷村君の議論を、智司がきわめて精緻にまとめあげるところを想像した。智司の口から、わたしたちの世代の人間が民主主義を通じて犯した罪状の数々が——たとい間接的な形であれ——読み上げられるのを。

それを、恐怖しているわたしがいるのだ。
タイマーの音が鳴って、張り詰めていた空気が微かに弛緩した。

固唾を飲む。

孫の口から「お前たちの青春は、今を生きる我々にとって良い結果をもたらさなかった」と暗に告げられるのは、

「否定側第二反駁、時間は三分間です。準備はよろしいですか」

それが当然の報いだとかわかっていても、

「始めてください」

耳を塞ぎたくなるものだ。

*

試合終了後、しばらく間があつてから、審判による試合の講評が行われた。

「……どちらが勝つても、おかしくない試合ではありましたが。しかし、」

と、瘦せぎすの眼鏡の主審が、一通り講評を述べ終えたあとで判定を告げる。

「今回は三対二で否定側の勝利です。お疲れさまでした」

わつ、と拍手に包まれる会場。続いて、両陣営の選手たちが健闘を讃え合つて握手を交わした。敗北した肯定側の選手たちも涙ぐみながら、表情の端に微かな充足の萌芽がうかがえる。

そんな様子を、一人呆然と見ていた。

智司が勝つた。嬉しいはずだ。よい祖父として、万歳三唱している自分はちゃんという。将来を支える若者たちの熱意と知性を、称賛している自分もいる。

しかし、今この席に座っているのは、一連の議論に打

ちのめされた、哀れな老翁だった。

健全な討論のために環境整備に努める、スタッフや審判の青年たち。おのが主張を掲げて堂々と鏗り合いをする、まだ中学生の少年少女たち。そして何より、『衆人環視の意思決定が、良い結果をもたらすとは限らない』という、議論の結末。

どれもこれも、あの時、諦めて手放したものだ。

ちらと見た腕時計の針は、まもなく正午を指さんとしている。

ちようど今日、いま時分だった。

灼熱の太陽ふりそそぐ大学のグラウンドで、敗北の艱難辛苦に耐えよと訴える指導者の声の前に、呆然自失で首を垂れていた。

二十三歳の大学生。先ほどまで演台に立っていた、中学生たちよりもよほど年上だ。善政を論じ合った、法学部や文学部の朋友が捨て駒として若い命を散らしたという噂を、何度か耳にしていた。しかし一度も声を上げなかった、その罪悪が、ラジオから聴こえてくる声に合わせて一気にのしかかってきた。

恐れたのだ。

己が国家の敵として槍玉に挙げられ、十字架の上の犠牲になることを。先ほどの試合の折、真逆の罪状で歴史の法廷に立たされることを恐れたように。

周囲では選手たちも観客たちも、興奮冷めやらぬ様子でさきの試合について語らいながら、つぎつぎと退室し

ているところだった。傍らにある杖に頼つてよろよろと立ち上がり、その後が続いた。かつ、かつと地面を突く金属の音が鳴り響く。

帰ろう、と思った。

こんな状態でいても、智司に申しわけが立たない。

昔も今も愚かで臆病な自分を呪いながら、入ってきたのと同じ扉から教室を出ようとした。

その時だった。

「あれ？」

聞きなれているからだろう、周囲の喧騒の中でもその声ははつきりと耳に飛び込んできた。

ゆっくりと振り返ると、先ほどよりも心なしか穏やかな、その母親譲りのビー玉が二つ、こちらを見つめていた。

「じいちゃん？」

*

空調の直撃しない場所に腰かけて周囲を見回すと、大学の施設というだけあって、ちよつとしたラウンジでもなかなかの広さがあることがわかる。

すぐ隣に立つ智司は、小気味のよい音を立てて二五分のブルタブを開栓すると、「はい」と言つて片方をこちらに差し出した。

「ありがとう」

受け取った缶から掌に温もりが広がる。

恰好つけて孫に飲み物を買ってやった所まではよかったのだが、久しぶりに購入した缶コーヒートの開封にここまで苦戦するとは思わず。「昔はペットボトルも開けられなかったのになあ」と思わずこぼすと、いつの話をしているんだと笑われた。

「それにしても、準決勝から来るなら言っておいてよ」先ほどスピーチをしていたのは打って変わって、穏やかな声で叱られる。

「ばあちゃんからは『午後から来る』って聞いてたから。びっくりしたよ」

「いやはや、申し訳ない」

「まだ決勝に出られるかわからないのよ」。昨晚智司の家に電話した際、彼の母親からそう告げられて予定を変更した、という経緯は、これから勝負に臨む戦士に向かって伝えるべきことではないと思い、手にしたコーヒートと共に飲み下す。

辺りには、おそらく大会出場者か見学者であろう学生たちが散見された。なかにはアベックと思しき男女も居るのが微笑ましい。

「試合の準備とかお昼ご飯とか、時間は大丈夫なのか」「まあ、一時間ぐらいは余裕があるから」

とんだめる声は低く、優しくかった。親の知らぬところで子が立派になっていた、という話をよく聞くが、いわんや祖父をや、というところか。

かと思えば、急に無邪気な顔で、

「それよりさ、どうだった、俺のスピーチ」

と伺う姿はまだまだ子供のころと変わらないようにも思える。なんだか不思議な感覚である。

「うまかったんじゃないか？ 早口だったから、おじいちゃんにはよくわからなかったけれど」

という答えは半分本当で、半分嘘だ。大まかな内容しか理解できなかったのは事実だが、その概要だけでも十二分に説得力があった。

思わず苦悩するほどには。

「ありがとう」智司のほうは回答に満足したようで、

「へタこいたときのスピーチ、聞かれなくてよかった」と、年相応の照れ隠しを付け加えることも忘れない。

そしてコーヒートをすすると、ご機嫌なまま、

「決勝も見にくるでしょ？」と尋ねてきた。

わたしは答えに窮して、唾を飲み込む。

コーヒートのせいだろう、苦い灰汁が喉に広がった。数秒の沈黙。

周囲の喧騒が急にうるさく聞こえる。

「この後、買い物に行かなきゃならなくてな」咄嗟に嘘をついた。残るのが身勝手なものなれば、帰るのもまた身勝手な理由による。「ごめん」と頭を下

げながら、勝手なじいちちゃんを赦してくれ、と心の中でつけ加えた。

智司は一瞬だけ首を傾げて、少し残念そうな表情を浮かべたが、すぐに、

「ばあちゃんに頼まれてるなら、しょうがないね」

と笑った。その逞しさにいたたまれなくなる。

徒競走もバスケットボールもピアノも見守ってきたというのに、まさか孫のスピーチが聞きたくなくて逃げだす、とは祖父失格もいいところだ。

しかし、聞き続けて智司を傷つけるような結果になることが、はるかに恐ろしかった。

先生がビデオ回してくれてるらしいから、現像したら今度見せに行くね、と精一杯の明るい声で智司は話し続けてくれた。うーん、今度は肯定側でスピーチするのに残念だなあ――。

え？

肯定側で？

驚いたあまりに口をついて出ていたのだろう。

「そうだよ。肯定側。さつきちゃんけんで決まった」と、きよとんとした顔で智司が続けた。どうやら聞き間違ではないようだ。

「おじいちゃんの勘違いでなければ、智司はさつきは否定側チームだっただろう？」

「うん。でも次は肯定側」なんでもないことであるかの

ように言ったあとで、

「あれ、もしかして話してなかったっけ」と前置いて、別にあれは最初から決まってるわけじゃない

くて、試合のたびに行ったり来たりするんだよ、と付け加えた。

わたしは啞然とした。

そうか、智司がスピーチコンテストなんぞとは違うのだと強調していたのは、そういうわけだったのか。

「もちろん、だいが長いこと準備してきてるし、まったく思ってもないことを主張するわけじゃないけど」両方の議論に自信があるし、どちらの考えにもそれなりに理があるとは思ってる、と誇らしげに語ったあとで、急に声を小さくして、

「でも、今回は肯定側のほうがちょっとだけ好きなんだよね」

そういつて、智司はじっとわたしの目を見つめた。

だから本当は肯定側の第二反駁を聞いてほしかったんだ、たぶんそっちのほうが上手くスピーチできるからさ、と微笑んだ。

その言葉に、わたしの中で凍てついていたものがゆっくりと溶かされてゆくのを感した。

もちろん、智司が許してくれた、だからあの試合でわたしが再認識するに至った悔恨の情は無かったことにしてよいのだ、というわけではない。

だがしかし——さつきと違うスピーチならば、それほど苦しまずに済むだろうし、という邪な気持ちもあることにはあるが、——それ以上に、一部の隙もないように思えた否定側の論理に、智司がどう返してくれるのか、

聞いてみたい、という思いが勝った。

もしそれを聞いて、少しでも、ほんの少しでも、何かわかることがあれば。

それは楽しみだ、と伝えようと試みた言葉はしかし、智司のやけに大きなため息にかき消された。

「でもしようがないよなあ……。ばあちゃんに頼まれた買い物なんですよ？」

はっとして、少し前のくだらない口実を思い出す。

「いや、それは……」

わたしは赤面した。今度は居残るための言い訳をしなくてはならない。まったく面倒な老人であることだ。

缶に口を付けると、コーヒの苦い温もりが、今度は少しだけ優しく広がった。

*

スピーチ中は厳格に守られている沈黙が、準備時間になると、こんなふうに堰を切って破られざわつくのも、この競技の面白いところだな、と見学二試合目にして感じる。

と、呆としている場合ではなかった。わたしは慌てて前方の一段高くなったステージを見上げる。

決勝戦というだけあって、立派な会場である。何やら官房長官でも喋り出しそうな立派な演題は、準備時間中の今は無人だ。その後方かけられたスクリーンには、

スピーチ時間を管理する巨大なデジタルタイマーが投影されており、傍らには、立派な仕立てのスーツを着たスタッフ——説明されたところによると某局のアナウンサーを務めているという——がマイクを片手に笑顔で立っている。通常時ならば学長やら理事長やらといった人々が重々しく闊歩するのだろうステージの上を、今、慌ただしく右往左往している影があった。ほかならぬ孫の智司である。

試合はここまで、準決勝を凌ぐ大熱戦が繰り広げられていた。特に否定側第一反駁のスピーチは舌鋒鋭く智司たちの立論を攻撃。谷村君は肯定側の第一反駁として、とてつもない速度でそれに応戦した。あまりの速さにわたしなど置いてけぼりを食らったのだが、そのような奮闘を以てなお、肯定側はかなり苦しい状況のようだ。

『……以上三点の指摘に明確な応答がない限り、肯定側のプランは否決されるべきです』

と、否定側第二反駁の選手が肯定側に対し、このように素人目にも厳しそうなハードルを突き付けてスピーチを終えたところで試合が中断されている。残すは智司の肯定側第二反駁のみ。そんな状況であるからして、大量の紙をめくりながら何やら相談しあっている智司たちの緊張感も尋常のものではない。

わたしは目前にずらりと居並んでいる審判陣の様子を眺めた。ここからは後頭部しか見えないが、ある者は首を傾げ、またある者は微動だにせず手元に目を落として

いる。この中のどれだけが肯定側を支持し、どれだけが否定側を支持しているのか。思いを巡らせるだけで力が入る。杖を握りしめる拳が震えた。

まっすぐ正面にある演台に再び目を向けると、先ほどまで駆けずり回っていた智司が、静かに立っていた。

手元の紙にちよちよこと書き込んだあとで、ゆつくりと顔を上げる。その表情は、強張っているようにも、僅かに微笑んでいるようにもみえる。凜々しくなった顔の上に二つ輝く、つややかなビードロは、審判たちを一通り見渡し、それからピタリと止まった。

わたしはじつと智司の目を見つめた。

彼はこれから、何を話してくれるのだろうか。——わたしたちの青春時代の苦い思い出に対し、何か答えてくれるのだろうか。

そんな身勝手な期待をかけた始めたところで、タイマーが鳴り響いた。耳に突き刺さるような、あまり心地よいとは言えない高音に会場の喧騒がピタリと止む。

「肯定側第二反駁の方、準備はよろしいですか」

一瞬の沈黙。

「はい」

「それでは肯定側第二反駁、時間は三分間です」
わたしは固唾を飲んだ。

「始めてください」

*

「たしかに、」

微かに息を吸い込んだ後で、語り出した声は静かだった。

「人間は過ちを犯します。だから、国会の意思決定に国民が著しく介入することは、予期せぬ問題を招くかもしれない。恐ろしい考えを容認してしまうことも、あるかもしれない」

思わず俯く。あの戦争を黙認した、若かりし頃の自分のことだ。権利の上に安住して、危機的な状況を歓迎すらしてしまう大衆の業。

「けれども、否定側は重要な問題を二点、見落としています」

そういつて、智司は否定側の議論を参照するよう審判に呼びかけた。

「まず一つは、」

手元に目をやり、再び審判団に目を向ける。

「判断を誤るのは、決して一般の大衆だけではない、ということですよ。否定側は様々な例を挙げていました。現在の世界における諸問題や、はては先の大戦における大衆プロパガンダの影響力について。けれどもこの問題を黙して見過ごしていたのは、決して国民だけではない。

政治家、官僚、いわゆる『プロフェッショナル』の面々もまた、目の前で進行していた事態に、手を出せなかったか、ないしは積極的に手を貸したのです」

と、先ほどまでの高速の試合展開が嘘のように、智司はゆつくりと、しかし確実に、先行する諸議論の内容を確認してゆく。会場全体は依然として静かだったが、前方に並んだ審判たちがしきりに紙をめくり、ペンを走らせる音が鳴り響いている。

「そしてもう一つ、さらに重要なことは、」

一息おいて、——それから、ゆつくりと顔をあげて、智司は、まっすぐわたしの方を見据えた。

「人間は間違えるだけでなく、その過ちをかみしめ、前進してゆくことができる、ということですよ」

智司の口角が微かに上がったような気がした。

わたしは黙って、続く言葉に耳を傾ける。

「独裁的な体制を支持してしまった人々は、その後もずっとそのままなのでしょう。そういう事例もあることは確かですが、そればかりでない、ということにはさきに我々が論じた通りです」

それからいくつかの論点を拾い上げ、その主旨を確認した。

「……すなわち肯定側から申し上げたいのは、大衆は、——もちろん、政治家や官僚と同様に、——その失敗を省み、そこから教訓を得ることができるということです」

ここで一呼吸。

そして、ひととき大きな声で続けた。

「有り体に言いましょ。人は、過ちから学ぶことができます」

わたしは静かに目を瞑った。

『過ちから学ぶことができる』。

聞いてしまえば、これほど単純な結論はない。しかし、智司の口から聞くその言葉は、未来への希望に満ちているように思われた。それも、優秀な若者たちだけでなく、愚かだったわたしたち老人も、ともに目指す未来への。

そうだ、あの頃、わたしはそのために同朋と激論を交わしたのではなかったか。たとえそのような清談が何一つ成果を上げなかったとしても、たとえ、死んだ仲間がもう帰ってこないとしても。

それでも、

「後からやり直せることは、そうではないこと以上にたくさんあるはずです。考えてみてください。かつて日本や欧州のいくつかの国に、間違った決断を支持した先達がいいたことは事実です。しかし、かれらは今再び同じ状況に置かれたとしても、同じ決断をするでしょうか」

智司は審判団のほうをぐるりと見渡しながらそう問いかけた。

そして、今度ははつきりとこちらを見て、一瞬だけ片目を瞬かせる。

わたしは、はつきりと首を横に振って応じた。

「……わたしは、そうは考えられないと思います。かれらが少しでも何かを改めたからこそ、今の社会がある」

手前に目をやると、全員ではなかったが、審判の数名も頷いている。智司はその反応をきちんと確認すると、

それでは適切な修正を加えてゆくためにはどのような制度が望ましいのか、肯定側が提示した議論を見てゆきましよう……と、再び表情を引き締めてスピーチを続けていった。

そこにはもう、徒競走で転倒してべそをかいていた、幼いころの面影はなかった。

*

「ほんとに見送っていかなくて大丈夫なの？」

まだまだ暑い中、正門までわざわざついてきた智司は依然として不安そうだったが、大丈夫だ、と断る。

「せっかくの受賞祝いだろう。友達とのんびり楽しんでおいで」

それでも心配する智司に、さつき公衆電話でハイヤーを呼んだから気にするな、と言ってやると、ようやく安心したようで、近いうちに遊びに行くね、ばあちゃんにもよろしく、と手を振り、もうくしゃくしゃになり始めている賞状を片手に、友人たちのもとに駆けて行った。

——やれやれ、いつのまにか孫に心配される側になるとは。もうお迎えも近いかもしれんな、と思っっているところに、ちょうど送迎車のお迎えが。

「どちらまで行かれますか」扉を開けて乗車すると、先ほどよりは少し若い、ダミ声の運転手に尋ねられる。バックミラー越しに顔を見せながら、「東峰大南門駅前ま

で……」と言いかけたところで、ふと思いついて口をつぐんだ。

「どうかされましたか」

「……いや、近くに本屋があったでしょう。そこに一旦、寄せてもらえますか」

そう言うと、運転手は驚いたのか、ふと振り返る。

「いえね、久しぶりに勉強でもと思ひまして」

わたしがニコリと微笑むと、運転手は、これは失礼しました、と頭を下げてから、前方に向き直ってシフトレバーを前後させた。重たいエンジン音が鳴って、ゆっくりと車体が動き始める。

窓硝子越しに通り過ぎ行く空は橙色に染まりかけていたが、ビルディングの谷間には、まだ燦然と輝く太陽があった。